

新年のごあいさつ

平成 28 年 1 月

院長 片岡慶正

明けましておめでとうございます。

皆様には、健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

将来を見据えた診療体制の整備

“明るい話題探し”が難しい局面の一年でしたが、当院では明るい話題として、“がんに一層強い病院”として着実な成果を挙げています。新たな放射線治療リニアックの症例も年間 100 例超の勢いで着実な治療効果の実績を挙げています。手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」も前立腺だけでなく、腎腫瘍および胃切除に適応拡大の中、患者に優しく有効な成績を積み重ねています。滋賀県内で唯一の「ダ・ヴィンチ」による胃がん切除は 9 か月間で 16 例に達し、トップランナーとして安心・安全な先進医療をリードしています。ドクターカー運用とともに、『救急ノンストップ病院』が日々バージョンアップしています。11 月には従来手狭であった『化学療法部』を『外来通院手術部』とともに琵琶湖ビューの楽しめる本館 6 階に拡充・移転しました。今や長寿国家のわが国では、国民の 2 人に 1 人がその生涯中に“がん”に罹患する時代となりました。健診センターをはじめ早期診断から、内視鏡的および外科的治療、化学療法、放射線治療そして緩和ケアまで、すべての領域のすべてのステージに一貫して密度の高い“がん診療”の充実を地域の皆様と共有できる環境が整備されたことは望外の喜びです。

患者ニーズと地域ニーズに応える

夏には診療所訪問を行い、地域の皆様のご理解をいただき、『かかりつけ医』登録制をスタートさせていただきました。かかりつけ医の地図、紹介パンフレットの院内特設コーナーを整備しました。患者さんの多くにご好評で、徐々に“地域医療機関の機能分化、強化と連携、在宅医療の推進”が浸透しつつある感を強めています。当院では、逆紹介の積極的推進に努めています。いざというときにいつでも紹介いただける体制をさらに強化してまいります。医療の質向上はもとより、患者ニーズに常にハートフルな病院でありたいものです。

患者ニーズに応じて医療ははじめてその輝きを増す。メイヨー・クリニックのコア・バリューは **The needs of the patient come first.** (患者のニーズが第一) です。この具現化には長年の磨き上げられた組織的強さと職員一人ひとりの誇りに裏付けされているのを自らの留学時に驚愕して実体験しました。医療に対する患者ニーズ、地域ニーズ、社会ニーズは過膨張の一途にあるといわれています。多様化、肥大化、複雑化した患者ニーズに応えるのは本当に難しいものです。しかし、今一度整理して単純化すれば、溢れんばかりの医

療情報が錯綜する現代社会において、“情報の非対称性”が逆に肥大化していることの認識と、患者ニーズの根底は“納得の医療”であることの再認識が医療者側に強く求められるのではないのでしょうか。医師をはじめ医療者は患者側から見た医療情報の非対称性が拡大する中で、個々の患者の求める情報の不均一性に敏感でなければならない。やはり、プロアクティブ思考での人間力の磨きが大切です。

地域とともにある市民病院

患者も医療者も自己変容が必要な時代に入った感が強い。わが国は世界に類を見ない長寿社会を迎えましたが、2025年問題での超高齢社会における医療・介護の最適化を求めて、今やまさに地域医療構想、地域包括ケアシステムが急ピッチで構築されようとしています。病院をはじめ医療機関では病床機能報告制度の下に地域における病床数と病床機能の適正化が大きくクローズアップされています。しかし、重要な点は、本来適切な医療・介護を享受すべき国民～地域住民の理解がまだまだ十分とは云えない現状です。住民参加の難しさはこの点においても“情報の非対称性”が大きな課題です。2014年医療法の改正で書き込まれた「国民の責務」について、どれだけの国民が知っているのでしょうか。以下の医療法第6条の2の3項に「国民の責務」が盛り込まれました。医療法で“国民”が主語になった初めての条文です。『国民は、良質かつ適切な医療の効率的な提供に資するよう、医療提供施設相互間の機能の分担及び業務の連携の重要性についての理解を深め、医療提供施設の機能に応じ、医療に関する選択を適切に行い、医療を適切に受けるよう努めなければならない』。今や一つの病院で介護を含めた医療すべての役割を提供することは困難な時代となりました。利用者側も一つの病院で医療から介護まですべてを享受する時代は過去となりました。地域包括ケアシステムを熟成させるのは制度ではなく、地域住民の皆さん自身であります。そのために必要な情報は何かを考える時代がようやく到来したと思います。この条文に記載された責務を果たすには、情報が欠かせないからです。これからはわれわれ医療者側も患者・住民側も学んでいく必要性が大きく問われています。国策レベルでの構造的変容が必要な時代に突入しました。医療の最適化は“まちづくり協働”の基本なのです。当院は今後も、地域医療支援病院として、急性期医療機関の中核として歩んでまいります。

対治と同治の医療融合

われわれは西洋医学を基盤に学んできました。しかし、われわれ日本人は古来、東洋的精神に共鳴する“心の遺伝子”を育んできました。仏教語に対治と同治という教えがあり、われわれ医療者に多くを語りかける学びの言葉・考え方です。例えば、風邪引きでの発熱に対して氷で冷やして熱を下げようとするのが「対治」で、温かく汗を充分にかかせて熱を下げるのが「同治」です。悲しんでいる人に、「悲しんでばかりではダメじゃないか。もっと元気を出せ」と悲しみから立ち直らせようとするのが「対治」で、「辛いだろうね。よ

く分かるよ」とともに悲しみを分かち合い、相手の心の重荷を下ろしてあげようとするのが「同治」です。「対治」は病に対して薬や手術でこれを治そうとする行為で、医者による治療はこの典型で、西洋医学の考えです。対治が現状を否定するのに対して、「同治」は現状を肯定するところから出発します。同治は病を受け入れて“あるがまま”を容認する東洋医学的考えです。末期癌の患者を看取る場合、最後はこの同治によるしか道がない。対治と同治は身体の治療に限らず、私たちの心の治療にもあてはまるように思います。患者ニーズの根底が、一人ひとりの“納得の医療”であるならば、医療者には対治と同治を統合的に包括した智慧の実践が求められます。当院における本年度の合い言葉は“自発と協働”です。職員一同、医療に身を投じた原点に立ち戻り、病めるヒトの心を中心においた視点で日々の診療に携わりたいものです。

結びに

今年の干支は申（さる）ですが、申年の申は本来「しん」と読み、「のびる」や「もうす」という意味があり、申には病や厄が「去る」という云われもあり縁起が良いとされています。大いに期待したいものです。新しい年が皆様にとりまして輝かしい一年でありますようにご祈念し、地域の皆様とともに歩ませていただけることに感謝いたします。本年もよろしくお願い申し上げます。

これまで皆さんと協力して準備してきたこと、整備してきたことを本格的にフル稼働する年にしたいと思います。皆様とともに歩む市民病院にご期待いただければ幸いです。